
魔法界超進学学園の日常。

譜月 赤夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法界超進学学園の日常。

【Nコード】

N9617X

【作者名】

譜月 赤夢

【あらすじ】

ようこそ、流歌特別学園へ。

ここは寮制の学園だけど、自宅から通うのもアリよ。自分自身で店を営んでもいいわよ。

あと、ここでは、特別な力…つまり、魔法を扱える人以外立ち入り禁止なの。

だから、言ってるでしょ？

流歌“特別”学園…って。

貴方は…入学希望かしら、それとも見学？

まあ、どっちでもいいわ。

この学園はいいわよ。

充実感もあるし、友情・努力・勝利を目指して頑張れるし、何より設備に力をかけてるからね！

詳しい学園説明は、入学してから案内するわ。
どうする？

試しに…入ってみない？

登場人物紹介

登場人物

・学園長がくえんちょう

性別不明、年齢も不明

だが、一人称が私や髪の毛が長いことにより、生徒たちは女ではないかと疑っている

本人は女であることも、男であることも全否定

髪の毛は足元まで伸びており、フードがついたローブを着ていて、本人は常にフードを被っているので顔はよく見えない

身長190cm

性格は俺様で面倒くさがりだが、生徒溺愛のドS

学園で一番偉い立場

魔界前例なしの最高最強魔法使いであり、実はすごい有名

魔法会制度で、レベルは前代未聞のSSS（トリプルS）

とにかくすごい人

使い魔は不死鳥のフェニックス

・愛楼あいろう 要かなめ

19歳の大学生である男

クールで冷静沈着だがこれでもお人よし

たまに面倒くさがるが、可愛いものには目がなかったりする

白銀の髪の毛はあちこちにハネているが、本人は気にしないらしい

身長185cm

大学では心理、魔術、戦闘、医術、経済、経理、考古学、音楽、環境、自然の計10学問のかけもちをしている

購買にある小さなお菓子屋さん、「Dream Butterfly

「y」の経営者

由愛と悠里の兄

生徒会長で、剣道部と弓道部部长、そして青竜寮寮長

寮部屋は青竜寮の001号室

使い魔は、黒猫のナイト

・愛楼 由愛^{ゆめ}

16歳の高校1年である女

大人っぽく、ツンデレだが仲間を何より大事に想っていて正義感が強い

やさしくてお人よしの心配性

桃色の髪の毛をそのまま太ももあたりまで伸ばしている

経営時は巫女のように下のほうで縛る

身長160cm

レベルはB

同じく購買にある小さなお菓子屋さん、「Dream Butte

rfly」の経営者

悠里の姉で要の妹

栽培委員の委員長で、茶道部と華道部部长、そして朱雀寮寮長

寮部屋は朱雀寮の001号室

使い魔は、白猫のラウ

・愛楼 悠里^{ゆうり}

13歳の中学1年である男

はっちゃけていてお人よし、人をからかうのが大好きな微Sだけど心配性

女装が大好き！

藍色の髪の毛を肩まで伸ばしていて、女装時は同じ色のエクステをつけるのみ

かなりの女顔で、身長は158cm

レベルはCだが、コントロールができないだけで決して下手ではない女装をすれば女にしか見えなく、女の子が大好きだが、結構付き合うとかに関しては真面目

同じく購買にある小さなお菓子屋さん、「Dream Butterfly」の経営者だが、あまり顔を見せないなのでよく由愛に怒られる

由愛と要の弟

演劇部の副部長

寮部屋は青竜寮の001号室

使い魔は、灰猫のダスト

・哀九 あいく とらおう 寅央

14歳の中学2年である女

とても明るく、少し天然というかバカに近い

髪の毛は栗色のショートカットで、身長155cm

レベルはD

運動委員の委員長で、演劇部所属

寮部屋は青竜寮の003号室

演劇と男の娘こ（つまり可愛い男の子）が大好きで、演劇の練習のために男装をしている

とりあえず、男装のことは今のところ悠里にしか気づかれていない

・紅 くれない

17歳の中学2年である女

大人っぽいが、可愛いものが大好き お酒も大好き

黒髪だが、少し紅も混ざっている

レベルはDだが、Bに近いレベルを持っている

生徒会書記で、弓道部所属&文芸部部长

寮部屋は朱雀寮の402号室

本当は高校生のはずが、出席日数が足りないため留年
サボり魔で、もし出たとしても大概是自分のクラスではない
使い魔は、鎖射兎兎というウサギ

・吟ぎん

14歳の中学2年である女

少しドジっ気があるが、素直で仲間思い

銀髪から、狐耳がはえている

身長は小学生並なので、マスコットのように可愛がられている
レベルはD

図書委員で、文芸部所属

寮部屋は朱雀寮の402号室

狐の半妖で、紅に可愛がられている

勉強、身体能力においてすべてダメダメ

ただし、癒しの魔法やサポートする魔法を使える

・藤堂 萌香とうどう もか

13歳の中学1年である女

天然で、常にはっちゃけているが、優しく時々落ち着いている

髪の色はピンクで、右のほうだけ三つ編みにしている

身長150cm

レベルはC

詠月の妹であり、由愛たちと幼馴染で、由愛が大好きでいつもべったり

悠里とは少し犬猿の仲

身長がほしいお年頃で、よく「Dream Butterfly」
を手伝いに行く

栽培委員副委員長で、茶道部と華道部の副部長

寮部屋は朱雀寮の001号室

使い魔はリスのブラウニー

・藤堂 詠月^{よづき}

19歳の大学生である男

落ち着いていて、しっかり物事を考えられるタイプだが、結構腹黒くドS

常に敬語

腰まで伸びている黒髪を、後ろのほうで縛っている　なぜかスーツを着るのが好き

身長は185cm

大学では、医療、魔術、戦闘、美術、語学、宗教学、文芸学のかけもちをしている

「Dream Butterfly」のオーナー

萌香の兄で、同じく由愛たちの幼馴染

生徒会会計で、武道部部长と弓道部副部长、そして白虎寮寮長

寮部屋は白虎寮の001号室

使い魔はロリスのナッツ

・リリア

15歳の中学3年である女

常に悪いことを考えていて、からかうのが大好き
金色のウェーブがかかった髪の毛を腰まで伸ばしている

身長は159cm

レベルはC

部活動も委員会も無所属

レノアの双子の姉、由愛の親友

寮部屋は白虎の002

使い魔はフェレットのリリ

・レノア

15歳の中学3年である女

常に悪いことを考えていて、からかうのが大好き

金色のウェーブがかかった髪の毛を腰まで伸ばしている

身長は159cm

レベルはC

部活動も委員会も無所属

リリアの双子の姉、由愛の親友

寮部屋は白虎の002

使い魔はフェレットのララ

学園紹介

御機嫌よう、私がこの学園の学園長だ。

軽く校内紹介をするぞ。

まずは教室。

小学校から高校までが普通クラス。大学からは専門クラスに分かれている。

普通クラスはA～Dまで分かれている。ちなみに、これはレベル別。頭脳と魔術によって入るクラスが異なるんだ。ちなみに、Aが優秀、Dが初心者って感じだな。

大学は名前の通り専門クラス。美術や経済、心理、魔術、戦闘、その他もろもろ：なんでもあるぞ。言われれば、増やすことだってできる。ちなみにこっちはA～Dに分かれてるわけじゃないから要注意だぞ。

次に寮。

寮は、四神に分かれてるぞ。

わかるだろう、四神：青竜、朱雀、白虎、玄武だ。

ああ、ちなみに寮エリアは本校の裏門から出て数歩歩いたところにあつて、その位置から東に青竜、南に朱雀、西に白虎、北に玄武がある。

そう言ってもいざというときわかりにくいだろうから、ちゃんと寮一つ一つの前にその四神の像が立っているけどな。

寮は二人で一部屋。

青竜寮だと青夕海、朱雀寮だと星降花園、白虎寮だと自源草原、玄武寮だと夢見山の景色がそれぞれ窓から楽しめるぞ。

部屋のサイズはホテルのスイートルームサイズ。一人ずつ自分のベッド（ちなみにベッドはキングベッドサイズ）と戸棚と机等を授かり、部屋の中はまた二部屋に分かれていて、キッチンやリビングもついている。

まるで我が家のような夢の寮だろう？ここは、我が家のように楽しながらも、母親の苦労を理解し、独り立ちしやすくさせることを目的にしている寮だ。

もちろん、どうしてもというやつらは家から通ってもまったく問題ない。

部活は、一人二つまで、委員会は一人ひとつのみだ。

多すぎると大変だろうからな。

もちろん、帰宅部・委員会なしという生徒もごまんというぞ。

再び校舎に戻ろう。

校舎は幼稚園・小学校用の校舎と、中学校・高校・部活・委員会用

の校舎と、大学専用校舎の三つに分かれている。

幼稚園・小学校用の校舎は「天使の学び舎」。

幼稚園から小学校にかけての子供たちは天使のように可愛いからな
…。

ちなみに、1階が幼稚園専用の階、2階が小学1・2年、3階が小学3・4年、そして4階が小学5・6年用の階となっている

中学・高校・部活・委員会用の校舎は「青春の集い場」

…ああ、言うのを忘れていた。

違う。

校舎の名前をつけているのは私ではない、違う！

校舎は1階が中学1・2年、2階が中学3・高校1年、3階が高校2・3年、4・5階が部活専用の階、そして6・7階が委員会専用の階だ。

大学専用校舎は「可能性ある未来」だ

これは私が名づけた。どうだ、かっこいいだろう？

…え？ かっこいいかっこよくないかはおいておいて、校舎の名前

としてどうなんだそれ…って？

……………。

大学の校舎は、5階建てで、それぞれの階に5〜8つの専門クラスがある…違う、泣いてなんかいないぞ…。

それと、ほかにもこの学園内には百を超える施設や建物がある。

その中でひととき有名なのが、流歌泉…どうやら、この泉の前で願掛けをすると願いが叶うとか叶わないとか…？

さあ、どうだ？

見たところ、お前にも素質はありそうだ。

ともに、魔界で一番有名なこの魔法学園、流歌特別学園に、転校してみないか？

魔法使いや魔女…さらには妖怪…とにかく、魔法が扱えるものが集まるこの超進学校では、今日も誰かが悲鳴を上げる。

「うわあああん！ここどこお…？」

「落ち着きなさい、萌香。僕にもわかりません。」

「お兄ちゃんのバカあああ…！由愛姉さまはどこおお…」

萌香は泣きじゃくりながら地面に膝をつく。

それに対する詠月はただ、困りましたね…とため息をつくだけだ。

「…あれ、ねえ…あそこにいるのって…」

「…大方、また迷子なんだろ…」

「…もうバカなんだよ、きつと！」

二人がいる位置からちょうど反対側、その部屋の入口から新たに三人の声が響く。

そのうちの一人の声を聞いて、顔を輝かせる萌香。

「由愛姉さまあああ…！！！！！」

思い切り中央に立っていた由愛にタックルを食わせる萌香。

「ぐふっ…ちょ、萌香、苦しい苦しい…」

「助かりました、要…悠里、次僕をバカ呼ばわりしたらあなたの口に腐ったケーキを詰め込みますよ？」

「俺は何もしてない。」

「うげっ、ご、ごめんなさいごめんなさい！！」

にっこりと笑いながら殺気を出す詠月に、要は冷静に、悠里は慌てて言葉を返す。

「…ったく、萌香も詠月兄さんも、どうやったら礼拝堂まで迷うのよ…。ここは校舎から結構離れたところなのに。」

すると今度はもう一つの声が、由愛ではなく悠里を襲う。

「悠里いいい！！！！」

「うわわわッ…と、寅央っ！？」

後ろから抱きつかれ、悠里は驚きながらも相手の名前を呼ぶ。

「今日も一段と可愛いねっ♪」

「さんきゅー♪…って、違う、抱きつくな恥ずかしい！」

むしろ誰か違う人が言ったら変態としか思えないセリフに、悠里は慣れたように返す。

…まあ、頬が朱に染まっている点で、言っていることは嘘ではないらしい。

「…いつも思ってるんだけど、あなたたち本当に付き合っていない？」

「はいはい、由愛サン、僕が男の子だということを忘れないでね。」

「甘いわ寅央。世間では同性愛だっているのよ？」

「黙れ由愛」

ここで断っておくが、由愛は決して同性愛が好きというわけでない…はず。

「僕はそんなじゃないから！ね、悠里！？」

「え、あ、ああ、そうだな…」

「ふふっ、冗談よ冗談。さっ、礼拝堂で騒ぐのも失礼だし、大堂にでも移動しましょう♪朝ご飯の時間よ。」

由愛は自らの魔道式ミニパソコンを取り出している。

そのパソコンに表示されている時計は、もう午前7時を指していた。

「おー、飯ー♪」

「もうそんな時間か…」

「いくいくー♪」

「ご♪は♪ん♪」

「こら、はしたないですよ萌香」

そして、一同は大堂へ足を運んだ。

A. M. 7:05~

「やっぱり先生って朝早いのかしら…」

一行が大堂につくと、生徒が数人、教師は全員席について朝食を食べていた。

「とりあえず、お盆を運ぶわね。」

由愛が人差し指を動かすと、人数分のお盆が運ばれてきた。

この学園の食事は、セルフサービス…つまりは、バイキングである。

数々の有名なシェフがここで働いているので、朝昼夜ともに、最高の食事がいただける。

「おお、さすがです！」

「由愛姉さまありがとー♪」

「…私これでもBクラスなんだけどね。」

「あっは、俺Cだし☆」

苦笑を浮かべる由愛に、苦笑を浮かべさせる悠里。それにさらに新たな追い討ちが。

「ボクD。」

ドヤ顔で言う寅央。

「…ここにAがいたら全部そろっような！」

絶妙なフォローを悠里が入れると、要はそそくさとその場を離れた。

「…ああ、そっか。」

「何がだ？」

「要にいい、万年Aクラスだったのよ。」

「はあああ!!??」

自らの兄のクセに、知らないのは何事か。

「まあ、私たち小学校のころからここにいてからね。なのに私はまだBクラスだなんて…屈辱的だわ。」

「俺小学校のころからずっとCだぞ!？」

「小学校の時からいるの!？由愛サン、すげえ…悠里、由愛サンを見習え!」

そういうと、悠里は少しむすっとした顔になる。

「俺はテキトーな技がつかえりゃいいの!大概の炎魔法や氷魔法はCクラスで習えるし。」

「そりゃあ、Bクラスはもっと専門的になるわよ?」

「…Aはそれよりさらに専門的だからな…時を操ったり、大気を動かしたり…地震を起こす、はBだったかな…」

話についていけず、きょとんと首をかしげる寅央と悠里。

「あ、でも運動ならだれにも負けない自信ある！」

運動委員長は自信満々そうに、Vサインを出す。

「そりゃあ寅央は運動委員長だもんな。」

「そうよねえ。運動は…まあ、私水泳嫌い。」

「俺はとりあえず動くのだるい！」

「自信満々に言うな…」

要はため息をつくのと、とっとと料理が置いてあるテーブルに向かった。

「ま、とにかく、ボク達も朝食食べよ！」

「そーだな！」

残りもそれぞれ料理が置いてあるテーブルに向かうと、そこには色とりどり、数々の料理が並んでいた。

「パフエってあるかな？」

「あ、朝からパフェ食べるの？」

「あるんじゃない？俺はケーキ取ってこよー！」

「お菓子屋さんのクセに店以外のケーキを食べるだなんて…」

ちなみに、由愛の朝食は常に和食である。

「一緒にとって来よー、悠里！」

「ん、おう！」

そういうと、悠里は寅央と一緒に菓子系が置いてあるほうへ向かう。

「ふう…御馳走様！」

「ごちそうさん♪」

「…馳走。」

三人が同時に手を合わせると、寅央は慌ててパフェを口に突っ込む。

「ま、待ってまだ食べ終わってない！」

「へーへー、待っててやるからとっとと食え」

悠里はそのまま、立ち上がりかけた腰をまた椅子に落ち着ける。

「じゃあ悠里に寅央、私たち先に行くわね」

「…課題を部屋に忘れてきた…」

「あ、ボクもだ。」

スプーンを咥えたまま、しまった、という顔で寅央はテーブルに突っ伏す。

「お前っておちよこちよいつーかなんつーか…取ってきてやるから、部屋の鍵寄せ」

ため息をつきながら悠里が席を立つと、寅央は頷きかけた首を慌てて横に振る。

「いっ、いいよ！自分でとる！」

「はあ？なんだそりや…ったく、しょうがねえから部屋で待ってっぞ。」

「うん、待ってて。あ、ちょっと待った！」

慌てて悠里を引き留める寅央。

なんだ？と悠里が振り返ると、寅央は満面の笑みで皿に残った野菜を指さした。

「これあげる。」

悠里はにこ、とやさしく微笑んで口を開く。

「全部食えコノヤロウ。」

「無理。ピーマン嫌い。レタス嫌い。きゅうり嫌い。かぼちゃ嫌い。トマト好き。」

「なんでトマト!?!…ったく。」

悠里は今一度ため息をつく、もう一度微笑み、かわいらしく首を傾げながら手招きする。

「寅央…おいで?」

「ん、何?」

男の娘が大好きな寅央は、てくてくと悠里のほうに近づく。

そして、悠里は笑顔のまま野菜を寅央の口に突っ込んだ。

「はい、あーん☆」

「んぐっ!?!に、苦いっ…!」

「吐き出しちゃだめだぜえ?ちゃんと飲み込め。」

にこにこ微笑みながら悪魔…いやむしろ背後に般若の面が見える気がします悠里君。

「うう…」

寅央は涙目になりながらも、何とか野菜を飲み込む。

「はいっ、よくできました。」

撫で撫で、と寅央をなでると、寅央は悠里を恨めしそうににらむ。

「子ども扱いするな！…もう、課題取ってくる！」

そのままてて、と部屋に向かう寅央とポケットに手をつっ込んだまま歩き出す悠里。

さあ、そろそろ朝の部活動の時間です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9617x/>

魔法界超進学学園の日常。

2011年10月28日23時09分発行